

「兼好自撰家集」秀歌評釈

稻田利徳

「徒然草」の著者に自撰家集のあることは広く知られているが、「徒然草」に比較してはるかに研究者の関心が低くて、関連論文も微々たるものである。

しかし、「兼好自撰家集」を「徒然草」の世界を念頭において読むと、兼好の苦悩や本音が吐露されていて実に興味深い。その味は、同じ和歌四天王の頓阿や慶運の和歌とは違い、詞書を含めて読むと、しみじみと彼の人間性に触れることができるところにある。その点、「兼好自撰家集」は「徒然草」理解の補助的な資料にとどまるものではなく、一人の人間の心情の軌跡を示すものとしての位置を与えられてよい。

ところで、いざ秀歌を選ぶとなると、特別にこれこそはと目を引くものは少ない。そこで、ここでは詞書を含めて味わい深いものを選んで評釈を行つてみたい。

「兼好自撰家集」に対しても、早く、富倉二郎氏が全歌にわたつて簡単な評釈を施しているが（『兼好法師研究』東洋閣・昭12）、これは「兼好自撰家集」の評釈としての嚆矢であつた。さらに富倉氏はその成果をもとに、簡潔な頭注として「類纂徒然草」（開文社・昭31）にまとめられた。また、川瀬一馬氏も「徒然草」（新註国文学叢書・講談社・昭25）の末尾に頭注を付して家集をおさめている。そこで、主として、この三つを隨時参照してゆき、各々、富倉評釈、富倉頭注、川瀬頭注と略称する。

また、ごく最近、斎藤彰氏が「兼好自撰家集註釈」を「國文学研究稿」に連載を開始され、現在、三号で二十五首まで註釈されている。これは非常に詳細な註釈で、その完結がまたれるが、私はそれとは別途に、秀歌選という姿勢で評釈を試みたい。

なお、底本は兼好的自筆稿本とされる、尊経閣文庫蔵「兼好自撰家集」を翻刻した「私家集大成中世Ⅲ」により、適宜、濁点を施す。歌の下の数字は「私家集大成」の通し番号である。

(いし山にまづとて、あけばのにあふさかをこえしに)

(1)あふさかの関ふきこゆる風のうへにゆくゑもしらぢるさくらかな

詞書によるとこの歌は、作者が滋賀県大津にある石山寺に参詣の

途中、逢坂を越えたとき、

雲のいろにわかれもゆくかあふさかのせきぢの花のあけばの、そら

とともによんだものである。

逢坂は三閨の一つとして、また、古来、歌枕として著名な関所だったので、曙に風に吹かれて散つてゆく桜の花は、ひとしお作者的心情をゆきぶつたものと思われる。

歌は逢坂の関を吹き越えてくる風に、桜の花びらが、いざくとももなく散り去つてゆく光景である。逢坂という著名な歌枕で、薄明るくなつた空に、まるで幻影のように白い花びらが飛び散つてゆくのに心をひかれたのであろう。

この歌の本歌としては、

風のうへにありかさだめぬちりの身はゆくゑもしらずなりぬべら也

(読人しらず・古今集・雑下・九八九)
が浮かぶが、(1)の歌はこの本歌から、「風のうへ」と「ゆくゑもしらず」をとり、落花を惜しむ心に変えている。

なお「ふきこえる」「こえる」は、逢坂の関の縁語になつており、「あふ」と「ちる」は対立語である。「関ふきこゆる」の表現をとりこんだ歌には、秋風のせき吹きこゆるたびごとにこゑ打そるすまのうらなみ

に先駆がある。

(1)の歌の主題は、散るだけでも惜しいのに、その散つた花びらまでも、風によつてゆく方知らずに吹き飛ばされる落花への愛情にあ

るだらうが、一方、見方を変えれば、逢坂の曙の落花の光景を美的にとらえたともいえるのである。

(三)

(2)ふかくさにかよひしころ、あか月きぬたうつを
ころもうつよさむの袖やしほるらんあか月露のふかくさのそ

(十一)

深草は京都市伏見区にある地名で、古来「伊勢物語」の「野とならば鶴となりて鳴きをらむ」の歌から、鶴や月がよくよまれる。

さて、富倉評釈は「ふかくさにかよひしころ」の詞書に着目して、「兼好は若き日こゝに住む女性の許に通つてゐたのである」とされ、(川瀬頭注も同じ)。これも確かに一つの受けとり方ではあるが、確証があるわけではない。「あか月きぬたうつ」の詞書に注目すると、これは「暁擣衣」の歌題であるので、深草での歌会に参加したときのものと考えられる。この点、斎藤彰氏が「草庵集」の「基任にさはれて秋の比深草にまかりて」の詞書をひき、歌会出席のためとしているのは私見と一致する。

(2)の歌は、暁方、露のしとどに置く深草の里で衣をうつてゐる女の夜寒の袖は、露と悲哀の涙とで濡れそぼつてゐるだらうという意になる。「露のふかくさ」は「露深し」と「深草」とをかけている。擣衣といふのは漢詩の世界から歌題として登場するのであるが、普通、この衣をうつ女は、愛する夫を戦場に送りだして、空闊をまもる人として設定される。従つて、この歌で衣をうつのは女であり、戦場に送りだした夫、あるいは訪問が間遠になつた男を思いながら悲しみの涙で袖を濡らしていることになる。ただ、ここでは深草の里の女なので「伊勢物語」を背景にしてゐるとみる方がよい。

深草の里といふ悲しい雰囲気をたたえたところ、暁方の深い露、夜の寒さ——こういつた環境の中で聞えてくる砧の音は、ひとしお感概深いものがあり、それらの思いをこめて、女の袖に涙をみてゐる。

なお、斎藤氏は、この歌の本歌として、

衣うつをとにしれとや秋の夜のふかきあはれも深草の里

(拾玉集・五三七・慈円)

を指摘されるが、発想の偶然の一一致であり、本歌と認定するのには躊躇される。

(3) もろともにきくだにさびし思ひをけかへらむあとのみねの松かせ

(一七)

「ぼうりむ」は京都市西郊、嵐山の東にある「法輪寺」。この寺に参籠したのは、おそらく出家後まもない時期であり、念佛修行を行つていたときのことであろう。

憂き世を厭い、無我の境地に心をすましているときに訪問客があつた。歌の内容からすると、この人物は兼好にとって歓迎すべき人であつたようで、辞去をつけたとき、二人で一緒に聞いてさえも寂しい峯の松風を、あなたが帰られた後で、私がどんな思いで聞くか、今思つてみてください、とうたつている。かくうたう背後には、今少し帰らないで欲しいという気持や、再度の訪問を望む思いが流露している。

松風の音は蕭蕭として寂しいものとされていて、ここでもそれを有効に持ち込んで孤独の寂しさと人なつかしさを表白している。なお「家集」には、

さびしさもならひにけりな山ざとにとびくる人のいとはる、まで

(一三一)

と人間嫌いの心情をうたつたもののほか、

人にしられじとおもふころ、ふるさと人のよかはまでたづねきて、よの中のこと、もいふ、いとうるさしとしふればどひこぬ人もかなりけりよのかくれがとおもふやまぢを

されど、かへりぬるあとといとさうべし

山ざとははれぬよりもとふ人のかへりてのちぞさびしかりける

(一三二)

と、人の訪問に微妙に揺れ動く心境を吐露した歌もある。

(4) おもひいづやのきのしのぶに霜さえて松の葉わけの月を見し夜は

(三三三)

詞書にある「人」は多分女性であろう。富倉評釈も「此の歌の相

手は女性と見るべきである」とする。

寒い冬の夜に、荒廃した家の簀子に尻をかけて、松の木の間から洩れてくる月を見ながら、暁までしんみりと話したあの夜の出来事を、今一度相手に想起させようとする。この夜のことが作者にとって忘れたかったのは、その体験が「源氏物語」(帝木)の雨夜の品定めの左馬頭の経験談——「荒れたくづれより」見ると、「この男、いたくそぢろぎて、門近き廊の簀の子だつ物に尻かけて、とばかり月を見る」の場面と類似していたことにもよろう。

歌は初句にまず「おもひいづや」と相手に強く回想に身をゆだねることを希求し、以下に、軒の忍草に霜が冴え冴えと置き、松の葉を洩れてさす月光を見ながら、語りあかした、あの夜のことを、具体的に場面設定する。「源氏物語」(夕顔)に「荒れたる門の忍ぶ草繁りて見上げられたる」ともあり、(4)の歌は「源氏物語」の場面に酷似した体験を重ねあわせているとみてよい。

冬の夜の寒々とした月光が松の葉をわけてさし、霜の冴えた夜に、親しい女性と語りあつた思い出は、作者にとって印象深いもので

あつたのだろう。

なお、「徒然草」の第百五段の、

北の屋陰に消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せた車の轍も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人離れる廊に、なみくにはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらん、盡きすまじけれ。かぶし、かたちなど、いとよしと見えて、えもいはぬ匂ひの、さと薰りたること、をかしけれ。けはひなどはづれはづれ聞えたるも、ゆかし。

は、(4)の歌の体験をふまえて虚構化したものと考えられる。

三月ばかりつれぐとこもりゐたる比、雨のふるを

(5)ながむればはるきめふりてかすむなりけふはたいかにくがてにせむ

(四二)

「雨」と「つれぐ」の精神状態との結合は、古来、夥しく歌によまれてきた。「つれぐ」とこもりゐたる比」という詞書には、作者になにかおもわしくない、陰鬱なことがあり、終日、家にこもつて雨をながめて物思いにふけつていたことが推測される。歌の内容は、鬱屈した気持でみるともなく外を眺めていると、春雨がけむるようになつてかすんでいる、今日もまた、どんなに暮れがたい一日を暮そうか、さぞ退屈するだろう、となる。

実は(5)の歌の次もこの詞書を受けた、

かくしつ、いつをかぎりのしらまゆみおきふしすぐす月日なるらん

(四三)

の歌が続く。「かくしつ、」とは「おきふしすぐす」を受けるが、また(5)の歌のような精神状態を受けているとも考えられ、このような状態がいつまで続くことかという歎息が聞えてくる。

この二首の歌が出家前か後かはつきりした根拠をもたないが、

いずれにしても、作者兼好の鬱屈した精神をかいまみることができて興味深い。

因みに、「春雨」を素材にした歌には、

春さめにやなぎのいとはそめかけつ花のにしきをはやもをらなん

しばらじよ山わけ衣はるさめにしづくも花もにほふたもとは

(四五)

などがある。

世中おもひあくがるゝろ、山ざとに、いねかるを見て
(6)よの中の秋田かるまでなりぬれば露もわが身もをきどころなし

(四六)

詞書の「あくがる、」とは「あく離れる」ことなので、世の中を離れようと/orしていた頃のことと思われる。種々な苦惱を味わつた末に、世を捨てようと思つて山里を彷徨してたとき、農夫が稻を刈りとつているところを見て詠じた歌であろう。

この歌の解釈として「兼好秀歌十首」(別冊國文学 徒然草必携 昭56・6)は「この世の中に飽きて、秋の山田で稻を刈る境涯にまでなると、稻葉の露もわが身もまるで置き場所がないよ」と解するが、作中人物をして、「稻を刈る境涯」になつたとするのはいかがであろうか。

「秋」に「飽く」をきかせていることは確かであるが、その掛詞を利用して二つの現象を表現していると思える。即ち、今まで露は稻の上に置いていたが、刈りとられてしまつたら、もう露の置きどころがない。それと同じく、私も世の中を厭つてはみても、身の置きどころがないということである。「露もわが身も」と表現しているのは、あのはかない露と同じような自分のたよりない身をもこめているのである。

兼好が見ていた稻刈りの田は彼の所有していた土地だったという見方もあるが、確証はない。

ともかく、この歌と詞書には鬱々とした作者の心情が溢れしており、やる方なき我が身に焦躁しているさまがうかがえる。なお、風巻景次郎氏は、この(6)の歌をもつて、兼好の出家が後一条帝崩御に殉ずるものでないことの例証の一つにあげられている。

(侍従中納言殿にて人々題をさぐりてうたよみ侍りしに)

薄暮帰雁

(7)ゆきくるゝもぢのすゑにやどなくばみやこにかへれ春のかりがね

(六〇)

「ゆきくるゝ」は「行き暮るる」で、雁が北へ帰つてゆく途中に日が暮れることを意味する。従つてこの歌は、飛んで行き暮れた雲路の末に、もし宿がなかつたならば、春の雁がねよ、再び都に帰つてきなさい、という意になる。

二条良基の「近來風体抄」には「其比は頓慶兼三人何も／＼上手といはれし也」とし、「兼好はこの中にちとおとりたるやうに人々も存ぜしやらむ。されど人の口にある歌どもおほく侍なり。都にかへれ春のかり金、此歌は頓も慶もほめ申き」とあり、この歌が頓阿や慶運から賞美されたとする。おそらく、侍従中納言（為藤）家の探題歌会の際に披露された歌であり、列席の歌人達が讃辞をもつて迎えた歌であつたろう。

それにしても、この歌が賞美されたのはなぜであつたろうか。古来、帰雁といえば、春の歌材として多くよみつがれてきたもので、雁が北に帰るのを見て、はるがすみたつをみすててゆくかりは花なき里にすみやならへる

(伊勢・古今集・春上・三二)

などと惜別の情をこめてうたい続けてきた。兼好はその雁との惜別

の悲しさを背景にして、雲路の末に宿がなければ「みやこにかへれ」と呼びかけて、新しい発想をうちだしているとともに「薄暮帰雁」の歌題にもかなつていて、當時の歌壇では、このような発想の歌が迎えられたのであろう。帰雁をよんだものには、他に、少し理づめになつてゐるが、現代人の鑑賞眼からみると、又もこむ秋こそいとゞたのまるれとまるとしなき春のかりがね

(二五一)

もある。

(8)さわらびのもゆる山辺をきて見ればきえしけぶりの跡ぞかなしき

(六七)

この歌は「続現葉集」（巻八）にも、次の延政門院一条の返歌とともに収録されている。その詞書は「堀川の内のおほいまうちぎみ身まかり侍にけるを、いはくらにおさめ侍て、又のとしかの山のわらびをとりてつかはしける」とある。「ぼりかはのおほいまうちぎみ」とは堀川具守（正和五年正月十九日没・享年六十八歳）で兼好的旧主である。その山荘が山城国愛宕郡岩倉にあつた。具守の一周忌に当つて、岩倉のあたりの早蕨をつんでつかわした相手は延政門院一条で、見るまゝになみだのあめぞぶりまさるきえしけぶりのあとのさわらび

(六八)

の返歌をしている。この贈答歌は従つて、具守の死の翌年の文保元年春のころの詠歌となる。

(8)の歌は「もゆる」に「萌ゆる」と「燃ゆる」をかけ、さらに、「きえる」「けぶり」が「もゆる」と縁語関係になつており、早蕨のもえでた山辺に来て（具守を火葬にしたその）煙も消えてしまつ

た跡を見ると、しみじみと悲しみを催すと詠じている。詞書を含めてこの歌を味読するとき、春の山辺に立ち、早蕨の萌えでた原を見て、主君のことを想起して、しみいるような悲しみにひたつてゐる作者の心情が素直に響いてくる。

なお、この歌は、富倉評釈、川瀬頭注、共に指摘がないが、「源氏物語」の早蕨の巻で、中君が光源氏に送った。

この春はたれにか見せむ亡き人のかたみにつめる峯のさわらびの歌を念頭において詠作されたとみてよい。

早蕨に取材したものは、この他に、

いまも又もえわたるなりときすぎてかれにしをの、春のさわらび

がある。

(9) 心にもあらぬやうなることのみあれば
すめばまたうき世なりけりよそながらおもひしまゝの山ざともがな

(八一)

「御子左の中納言」は、二条為定のことと、庚申に、螢火秋近」とぶほたるまだつけこさぬくもるよりゆきかふ秋と風やふくらむ

(九七)

歌会を催したときに提出した歌である。

この歌は、富倉評釈も指摘するように、「ゆきかふ秋と風やふくらむ」が、夏と秋と行きかふそらのかよひぢはかたへすゞしき風やふくらんの歌を念頭においている。

(躬恒・古今集・夏・一六八)

いえがいていたことが、どれもうまくやかないあせりがあつてのことだろう。「やうなることのみ」には八方ふさがりの絶望感がある。また、歌本文の、「よそながらおもひしまゝの山ざと」とは出家する以前に想いえがいていた理想的な山里である。だからこの歌は出家直後の頃のものとみてよい。

世をのがれて、いざ山里に住みついてみたが、やはりここも憂く辛いところであつたことだ、以前から想いえがいていた通りの山里

があつてほしいものだというのが歌の意である。「家集」では、この詞書のもとに、

なにとかくあまのすて舟すてながらうき世をわたるわが身なるらん

(八二)

山ざとのかきほのまくずいまさらにおもひすてにし世をばうらみじの二首が続くが、八三番の「いまさらに…」には、出家しても、完全にはこの世のことが忘れきれない執着心がうかがえる。

この一連の三首からは、出家後の兼好の心情を察することが出来て興味深い。

(一一二)

(五月廿日ころ、御子左の中納言との、庚申に、螢火秋近)

(10)

「まだつげこさぬ」とは飛んでいる螢が、秋の到来を告げてこないことである。それでもなお、空の通路より夏と秋がゆきかうとして、涼しい風が吹きはじめているだろうと推測している。歌題が「螢火秋近」なので、当然、螢の火が秋の近いことを知らせることになるが、この発想は「伊勢物語」の、

ゆく螢雲のうへまでいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ

(第四十五段)

などから生まれたものであり、かつ、(10)の歌も「とぶほたるまつげこさぬ」からみて、この歌を念頭に置いていたとみてよい。

ほのかな光を点滅させながら乱れ飛ぶ螢は、まだ秋の到来を知らせないが、もう秋はそこまできて、涼風が吹いているだろうと思いつている。秋の到来を待ちわびる気分が古歌を媒介として想像を存分に働かせて一首をつくりあげている。

なお、螢に取材した歌は他に一首
とぶほたるなぞやうき世のにごり江にかけをかくさでもえわたるらん

がある。

(民部卿殿にて、をの／＼歌よみて、ほめそしることありしに)

五月雨

(11)もがみ河はやくぞまさるあまぐものばればくだる五月雨の比

(一一六)

こここの民部卿も二条為定を指す。彼の邸で褒貶歌を提出したとき

の歌である。この歌はいうまでもなく、

もがみ川のばればくだるいなふねのいなにはあらずこの月ばかり

(古今集・東歌・一〇九二)

を本歌とする。本歌は「のばればくだる」という反意語連鎖表現に興味があつて著名な歌となつてゐるが、ここでは稻をつんだ舟が最上川を上下するさまをつたつてゐる。これに対し(11)の歌は、雨雲が水上にのぼつたかと思うとすぐに、雨水が降つて増水して下つてくることに転化している。

従つて一首の意は、
最上川では、雨雲が水上に上つたかと思うやいなや、早くも水薺をましに川をくだつてくる五月雨の頃であることとなる。
この歌は「藤葉和歌集」(卷二)にも入集している歌であるが、

全体に力感的なリズムがあり、五月雨の頃の最上川の水量のすばやい変化を巧妙にとらえている。

なお、富倉評釈は、この(11)の歌が、芭蕉の「奥の細道」所載の句「五月雨を集めて早し最上川」の母胎をなすものとして有名であるとしているが、山本健吉氏は、「最上川」「早し」「五月雨」の三語の符合から、よく兼好のこの歌を引き合いにだすが、両作品の関係を考える必要はないとされる(芭蕉)。

(一一七七)
(民部卿にて、をの／＼歌よみて、ほめそしることありしに)

寄湖恋

(12)心をぞこほりとくだくすはのうみのまだとけそめぬ中のかよひぢ

この歌も(11)と同様、為定卿家での褒貶歌会の詠歌である。

(一一五)
「すはのうみ」は信濃の「諏訪湖」であり、和歌にも、

諏訪の海の氷の上のかよひぢは神のわたりてとくる也けり

(堀川百首・顕仲)

などはじめ、氷のはつた湖としてよまれることが多い。「心をぞこほりとくだく」とは、恋情に悩んで心をあれこれと碎くことを、氷を碎くことに関連付けてゐる。

この(12)の歌は「寄湖恋」であるので、諏訪湖の氷がまだ解けはじめないよう、二人の仲も心を千々に碎いても、まだ、うまく解け合つことができないとの恋情をうたつてゐる。心を千々に乱すことをして「諏訪湖」の氷の関連で「こほりとくだく」とし、二人の仲がしつくりしないのを「まだとけそめぬ」としたところに斬新な表現がみえる。「くだく」「とけそめ」は「氷」と縁語関係にある。

また「中のかよひぢ」は、勅撰集では、
むなしくして月日は越えつ逢ふ事をへだつる闇の中の通路
(為道朝臣・新千載・恋三・一二九八)

関守の打ちぬる程と待ちし夜も今は隔つる中のよひ路

(侍従為敦・新後拾遺・恋四・一一七七)

ほかがあるが、どの場合でも、うまくうち解けて通える路とはなっていない。

○おぼろのし水をたづねて
秋の夜

(13) おぼはらやいづれおぼろのし水ともしられず秋はすめる月かな

(一三四四)

「おぼろのし水」は、山城国愛宕郡大原村にある歌枕で、古来、水草ゐしおぼろの清水底すみて心に月の影はうかぶや

(素意法師・後拾遺・雜三・一〇三七)

程へてや月もうかばん大原やおぼろの清水すむばかりに

(良運法師・後拾遺・雜三・一〇三八)

などと、月をひきあいに出されることが多いが、(13)の歌でも月がでている。

歌は、大原に来て見ると、秋の月が澄みわたって、どこも朧でないよう、いつたいどこが朧の清水かわからぬ景を描いている。この(13)の歌の趣向は、「おぼろ」といえば春の景物であるのに尋ねて行った時がちょうど秋の月の澄みわたった夜であったので、どこが「おぼろの清水」かわからないと発想したところにある。詞書にわざわざ「秋のよ」と追加したのは、この趣向を明確化させるためであつたろう。また、「おぼろ」と「すめる」も対照的にもちこんでいる。

詞書によると、秋の夜、兼好は大原村にある歌枕の朧の清水を尋ねて行つたらしい。しかし、彼の心をとらえたのは、大空から澄みきつた光をなげかける月光であった。この歌がよまれたのは、出家の前か後か判然としないが、前の二首が、山ぎとはとはれぬよりもとふ人のへりてのちぞさびしかりける

(一三二)

あらしふくみ山のいほのゆふぐれをふるさと人はきてもとはなん

と出家後の歌のようなので、(13)の歌も出家後の可能性が強い。

(一三三)

○藤原行朝すめ侍し、かしまの社のうた

(14) 風さやぐ岡のふゆくさけきのまにうづもれはて、雪はよりつ。(一三八)
詞書でいう藤原行朝は二階堂貞綱の子で、左衛門尉、信濃守、從五位下、正中三年(一三一六)出家した人物。「かしまの社」は、茨城県鹿島町宮中にある大社である。

この歌は時間の経過を念頭において味読する必要がある。「風さやぐ岡のふゆくさ」とは岡に茂つてゐる枯れた冬草を風が吹きゆるがすことであり、この状態は雪の降りはじめた今朝まで作者の感覺でとらえられていたのである。その冬草が、今朝降りはじめた雪のためにすっかり埋もれてしまつたとうたう。「けさのまに」と表現するとき、ほんのわずかな時間で埋もれたことへの驚きがあり、また一方ではかなり激しく降つてくる雪を想いえがかせる。最後を「雪はよりつ」と現在も継続して降り続いているように表現しているのも力動感がでている。

この歌はまた、「風さやぐ」と昨日までの冬枯の動きと「うづもれはてし」の静かさとが時間の経過によつて対照されている。

「うづもれはて、」の表現をとり込んだ勅撰歌には、雪をれの音だに今朝は絶えにけり埋れ果つる峰のまつ原

(藤原隆祐・統千載・冬・六六七)
訪ふ人をまつと頼みし梢さへうづもれはつる雪のふる里

(津守国助・統千載・冬・六六八)
などがある。

先坊御時、御歌合につかうまつりし五首、元亨三年の事にや

(15) 秋ふかき霜をきそふるあさぢふにいくよもかれずうつころも哉

先坊は邦良親王を指す。後二条天皇皇子。文保二年（一三一八）

（一五七）

三月立坊、嘉曆元年（一三一六）三月二十日没。「兼好自撰家集」では、他に「正中二年、春宮よりうためされ侍しに」（一〇八）と「前坊御まへに月の夜權大夫殿などさぶらはせ給て」（二七八）の二箇所に登場する。

「あさぢふに」とは、川瀬頭注が指摘しているように「あさぢふのはえたあれた宿に」という認定である。秋もしだいに深くなるとともに、霜が置きはじめた浅茅のはえた荒れた宿からは、幾夜も幾夜も絶え間なく衣をうつ音がするという意である。

この歌はまず、晚秋の霜置く頃という季節の設定が哀感をかもしだしている上に、さらに浅茅の茂つた荒れた宿をだし、そこに砧をうつ音を点描して、静寂な悲しみを響かせている。擣衣の伝統からすれば、衣をうつているのは女性であり、男のことを思つてのこととみてよい。

秋の霜夜の寒さの中に響く槌の音、それを幾晩も続いているところに、聞くものをして、しんみりとさせる雰囲気がある。まるで、物語の一場面を切りとつてきたかのような歌となつていてる。

ひとり花のもとにたづねりて

(16) 見ぬ人にさきぬとづむ程だにもたちさりがたき花のかげかな

（一六二）

詞書と和歌が融合し、平凡ではあるが、しんみりした味がある。「ひとり花のもとにたづねりて」という詞書には、桜の花を探して、見たこと、しかも「たづねりて」の表現には山桜の花を探して、山深くわけ入った行動がしのばれる。出家後の草庵の独り住みの或る日の行動を示しているようにも思われる。

作者は山にわけ入つて、すばらしい桜の花を尋ね当て、この美しい花を見ていると、この桜を知らない友にも告げ知らせたい心持になってきた。しかし、それを告げて行く、ほんのわずかな間でも、桜の木のもとを立ち去りがたいとうたう。花のかげからほんの少しの間も立ち去りがたいのは、花の美しさのとりこになつてゐるためもあり、また、自分がその場を少しでも離れている間に、風に吹き散らされそだという危惧の念からといふ二重の原因が考えられる。畠倉評釈は「見ない人に咲いたと告げる間すらもあまり美事なので立去ざるにしのびない花の下であるわい」とする。

古来、桜の花の美しさをめでる歌は夥しくあるが、花を見ない人に告げ知らせるはんのわずかの間でも立ち去りがたいと発想したのは珍しく、作者の手柄となつてゐる。

孤独な生活を続いている身で、山桜の花を見つけ、知らない人に知らせたい思いをおさえつつ、うつとりと立ちつくす作者の姿が彷彿としてくる歌である。

御子左中納言家にて、春風

(17) みなと河ちりにし花のなごりとやくもの浪たつ春のうら風（一六七）

「御子左中納言」は既出の二条為定。「みなと河」は摂津國武庫郡を流れる川。「千載集」頃から歌によまれるようになつた。

作者が散つた花を詠ずるのに「みなと河」を選んだのは、ちる花のがれていづるみなどがはいづくか春のとまりなるらん

の歌にもみえるように、散つた桜の花びらの行きつくところを設定したかつたためであろう。

また「くもの浪たつ」という奇抜な表現があるが、これは、天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ

（珍誉和歌四）

の表現をとり込んだものである。「花の浪」とせず、「くもの浪」としたのは、桜の花を白雲に見立てていたことが前提となっているのだろう。

歌の意は、ここ湊河には吹き散った桜の花の最後の名残りとしてであろうか、春の浦風に吹かれて、雲が白い浪のように立っていることだ、となる。

川の白い飛沫、そのなかに白い花びらがいっしょになつて浪を立てているのである。歌題は「春風」だが、ここでは、風は桜の花を散らすとともに、浪を立てさせるものとして作用している。

(建武)一年、内裏にて千首歌講ぜられしに、題をたまはりてよ

みてたてまつりし七首) 秋天象

(18) よもすがらそらく月のかげさえてあまの河せや秋こほるらむ

(一七二)

建武二年は後醍醐天皇の年号であり、この千首歌は建武中興の御代を祝して催されたものである。従つて、兼好もこの七首提出歌の「春植物」では、久方のくもるのどかにいづる日のひかりに、ほふ山ざくらかな

(一七〇)

と、のどかな光に照り映える山桜を詠じ、また「雜地儀」でも、せり川のちよのふるみちすなほなるむかしの跡はいまやみゆらんと詠じて御代を祝している。

さて、(18)の歌であるが、「あまの河せ」とは、忍びあまりあまのかはせにことよせんせめては秋を忘れだにすな

(正一位経家・新古今・巻一・一二九)にも用例があるように、銀河の瀬のことである。一首は、一晩中、空を渡つて行く月の光が寒々とさえわたつていて、天の河の河瀬は

まだ秋なのに、すでに氷つていないだらうかとなる。秋の空に澄みわたる月光を冴え冴えと寒い感触でとらえたので、天の河瀬が氷つているだらうかという奇抜な発想をうんだのである。

この歌は、一晩中、秋の空にすむ月を眺めているという時間の経過があり、そこから天空の河瀬に思いをはせていく。「秋こほるらむ」としたところに意外性がこもり、それによつて、秋の月光のさえているさまが強調されることにもなる。

(ある人のもとにて、をの／＼五首のうたよみしに)

野外冬月

(19) 冬がれはのかぜになびく草もなくこほるしも夜の月ぞさびしき

(一八〇)

詞書の「ある人」とは「草庵集」の同歌題歌の一一致により(七四・七六七・九七三・一〇五四)、二条為定とみてさしつかえない(「草庵集」には、「御子左大納言家五首」とある)。

一首の歌の世界は、冬枯れとなつた野原には野風になびく草さえもない、そこに氷りつくような霜夜の月が寂しい光をなげかけてい

るとなる。「こほるしも夜」の措辞は、網代もりさぞ寒からし衣手のたながみ河もこほる霜夜に

(前大納言爲家・続古今・冬・六三七)

にもみえる。

草木も枯れた荒寥たる野原に風が吹いている——この景はさびさびとした世界である。しかもこの歌では、寒い霜夜であり、荒寥たる野原に月光が落ちてゐるといふ、まさしく冬の月の寂寥たる寂しさが、冴えた空氣とともに染み込んでくる世界をつくりあげてゐる。下二句の「こほるしも夜の月ぞさびしき」は、あまりに感情をあらわにだしているが、上三句の「冬がれはのかぜになびく草もなく」の表現は優れている。中世人の讚美した寂寥美をとらえた一首とし

て味読すべきである。

なお、川瀬頭注は第五句を「月ぞきむしき」と誤読している。

海のほとりのちどり

(20) 難波がたみちくるしほに風たちてあしの葉さやぎちどりなくなり

(一八一)

この歌も前の(19)の歌と同じく「ある人のもとにて、をの／＼五首のうたよみしに」の内の一首である。頓阿はこの「海辺千鳥」の歌題で、松にふくしほ風さむみ庵原やみほの沖津に千鳥鳴くなり(七四一)

松が吹きおこり、声の葉をさやさやとそよがせているが、そのそよぎの中で千鳥が鳴いている景である。

潮が満ちる、風が立つ、声がそよぐ……、こういった一連の連鎖

反応としての動きをともなっているとともに、聴覚的には声の葉のさやさやという葉ずれの音と千鳥の哀韻をこめた鳴き声が響いていいる。全体に調べが力強く、万葉調のようだ。

桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る

(高市黒人・万葉・卷三・一七一)

といつた著名な歌や、

夕月夜潮みちくらし難波江のあしの若葉にこゆるしらなみ

(秀能・新古今・春上・二六)

などの歌を想起させる。

あさぐもりのそらいとおもしろし

(21) 朝まだきくもれるそらをひかりにてさやけくみゆる花のいろ哉

(一九〇)

「あさぐもりのそら」に情趣をみいだしているのは、作者の特異な美意識を示しているとみてよい。

歌の内容からすると、空が曇っているのではなく、朝まだ早いの

で霞や靄などがかかるて曇っているらしい。そういうた空のもとで見た桜の花に焦点をしほつて、「くもれるそらをひかりにて」とは奇妙な表現だが、富倉評訳では「曇つてゐる空のかすかな明るさで」と解している。従つて、この一首は、朝まだ早いの空は曇つてゐるが、その空のかすかな明るさによって、桜の花がさやかに見えることだと解される。「くもれる」と「さやけく」とは対照的に表現されている。花の白さが朝の太陽に照らされているのではなく、薄雲りの空のなかに、白い花の色のあざやかさがとらえられているのである。「玉葉集」にある、春はたゞくもれる空の曙に花はとほくて見るべかりけれりの歌が連想される。

(従三位親子・春下・一九八)

(遍智院宮よりめされしに、よみてたてまつりし歌)

(22) さても猶よをうの花のかげなれやのがれていりしをの、山ざと

(一一一)

遍智院宮とは、原本に「聖尊法親王」の朱書の肩書きがあるよう^{に、後二条天皇第三皇子。仁和寺門跡。建徳元年(一三七〇)没。享年六十八歳。}

「よをうの花のかげ」の「う」には、「卯の花」と「憂し」をかけている。「さても猶」には、心中で、ある種の期待感をもつていたものが、案にはずれた感情を示す。この場合は、世を逃れて小野の山里に住みつけば、世の憂さから逃れられると思っていたのに、それがかなわず、なお憂さはつきまとっているというのである。

一首は、世の憂さを逃れて小野の山里に入つてはみたものの、そ

こも憂きところなのが、卯の花が咲いていることだという意になる。

「をの、山ざと」は普通名詞とつてもさしつかえないが、「富倉評釈・川瀬頭注」ともに固有名詞となり、「山城国愛宕郡小野郷」とする。また、安良岡康作氏は「をの、山ざと」を兼好が山城国山科小野庄の田地一町を買いつつたという大徳寺文書と関連付けておられる（「兼好の遁世生活とつれぐ草の成立」文学・昭33・9）。

この歌と近似した心境をうたつたものは、すでに評釈した
すめばまたうき世なりけりよそながらおもひしまゝの山ざともがな
れる（「兼好の遁世生活とつれぐ草の成立」文学・昭33・9）。

にもみてとれる。

いくら世の憂きから逃れようとしても、現世においては逃れきれない。そういう焦燥感ともあきらめともつかぬ心情を吐露している。晴の歌として聖尊法親王に提出した歌ではあるが、その点、個人的な感情を色濃く残した歌であり、当時の作者の苦悩の一端をかいまみることができる。

（遍智院宮よりめされしに、よみてたてまつりし歌）

（23）たまくらの、べのはつしもさゆる夜のねてのあさけにのこる月かげ

（一一八）

「ねてのあさけ」は「古今集」の大歌所の歌

水ぐきのをかのやかたにいもとあれとねでのあさけのしものふりはも
に依拠している。「古今集」の歌は、岡の屋形で妹と我とが共寝をして、その夜明けの霜を思いやつてゐるが、（23）の歌は「たまくらの、べのはつしも」とあるので、手枕をして野辺のあたりに一夜を明したと考へられる。その夜は初霜が置いて寒い夜であつたとして、一夜寝てのあけがたに残つてゐる月を見ているのである。

この歌で問題となるのは、初霜がおいて寒い夜に手枕をして、一

（24）おどろかすかねのをときへき、なれてながきねぶりのよもなし
（八一）
（しはすのつごもり、あはれなることゞもおもひづけて、う
ちもまどろまぬに、かねのをといと心ぼそし）

（24）おどろかすかねのをときへき、なれてながきねぶりのよもなし
（二二一七）

詞書自体からして、しんみりした気持を伝えている。時は十二月の晦日であり、この一年にあつた「あはれなること」ともをあれこれと回想しながら、作者は寝つかれずに悶々としている。そこへ諸行無常の理を知らせるかのように鐘の音が響く。まんじりともせずには、その音を心細く聞いてゐる作者の孤影が彷彿としてくる。この詞書は、（24）の歌の前の前

春ちかきかねのひゞきのさゆるかなこよひばかりとしもやをくらん
（二二一六）

と二首にかかる。

（24）の歌の「おどろかす」は眠りをさますことであるが、ここは「ながきぬむり」（無明長夜）とあるので、豁悟の気持も含んでいよい。川瀬頭注は「さむるよもなし」の「よ」に夜と節がかけてあるとする。

「おどろかすかねのをときへき、なれて」は、目をさまさせる鐘の音を聞きなれてしまつてと、現実生活をうたつてゐるとともに、一方では鐘の音が諸行無常を知らせるものとしても働いてゐる。

従つて歌の意は、この世の諸行無常を知らせて豁悟をうながす鐘の音にも、すっかり聞きなれてしまつて、無明長夜の迷いの夢から

夜寝たあけがたの空に残つてゐる月を見たときの感情である。おそらくこの残月は寒々として空に浮んでいたのであろうが、一方では昨夜の種々な思いをこの月にみいだし、寒々とした月光が、眺める人の胸に染みいつたであらう。全体に感情をまじえず、叙景をつきたたせているが、その背後に、こまやかな艶の気分がただよつてゐる。

さめることもないとなる。この歌は出家後の歌だろうか。来し方行く末を「あはれ」と思いつつ、まんじりともせずに鐘の音を心細く聞いている。迷いの夢は、深く作者の心をとぎし、不安をかきたてゆくのである。

あはれる夢を見てうちをどろきたるに、かたるべき人もなければ

(25) きめぬれどかたるともなきあか月のゆめのなみだに袖はねれつ、

(一一三〇)

この歌も詞書を含めて味読すると、しみじみとした心情が伝わってくる。

作者は夜中に「あはれる夢」を見て目を覚ましたが、そこにはその哀れな夢を語るべき友は一人もいなかつたという。この体験はおそらく、出家後の草庵での独り住みの頃にあつたことであろう。

哀れな夢を見て、ふと目を覚ました、明方にはまだ間があつて部屋は薄暗い、そこにはその夢を語る友もいない、ただ、夢を見て流逝した涙で袖が濡れているばかりであるとうたう。「ゆめのなみだ」という圧縮表現が生きている。

ここで抽象的に言つてゐる「あはれる夢」とは、具体的にどんな内容の夢であったのか。実は、(25)の歌の次も、この詞書のもとによまれた、

見ずもあらでゆめの枕にわかれつるたまゆくゑはなみだなりけり

(一一三一)

の歌である。この歌の富倉頭注は「逢わないという程でもなく、さらばとて逢つたという程でもない、夢の中のはかない逢瀬に、目ざめた今、我が魂はただ涙にくれるばかりである」と解する。すると、夢は恋しい人との逢瀬と離別であったと考えられる。

(25) の歌で「ゆめのなみだに袖はねれつ、」には、恋しい人とのは

かない別れで流した涙がこめられているようである。
ともかく、この歌からは、詞書とともに味読するとき、隠遁者の身をきるような孤独感が脈々と響いてくる。

なにごともほどあらじとおもへば

(26) つきこともしばしばかりの世中をいく程いとふわが身なるらん

(一一三三)

「ほどあらじ」とは、長いことではないということ。ここは種々の憂きことが、作者の身にまとわりついている現実にあつて、どんなことも長くはないと自から慰撫した姿勢がある。

歌はこの詞書の理をうけて、憂く辛いと思うことも、ほんのしばしばかりの世の中であるのに、自分はどうして、これほどまでに世を厭わしく思うのであろうかとなる。

色々な憂きことに苦惱する自分を一步つき離し、はかない世の中にあつては、この憂きことも、ほんのしばしのことだ、そんなに深刻に悩まなくてよいと自省しているのである。

しかし、このように自分を納得させようとした作者ではあるが、どれほど諦観したかは全く疑問である。「なにごともほどあらじ」と自省したときには、その通りだとは思うものの、やはり現実の苦惱から完全に逃れることはできなかつたであろう。そこに焦燥の心情が流れている。

この歌は出家前とも後とも考えられるが、この歌の次が、

いづかたにも又ゆきかくれなばやとおもひながら、いまは身を

こゝろにまかせたれば、中／＼をこたりてのみぞすぎゆく

そむく身はさすがにやすきあらましに猶山ふかきやどもいそがず

(一一三四)

と出家直後の歌なので、この一連の歌は出家後の心理を詠じたものかもしれない。

(春月)

(27) さやけさはをとにのみこそきこゆなればそたに川の春のよの月

(一三九)

「ほそたに川」に対して、川瀬頭注は「ほそい小さい谷川の意で、ど」とさした地名ではなからう。とされたが、ここはやはり、まがねふくぎびの中山おびにせるほそたに川のをとのさやけさを本歌とみて、備中國の細谷川とみたい。「をとにのみこそきこゆなれ」は、河音だけが聞こえる意と有名であるとの二重の意をきかせている。

従つて一首には、細谷川の上にでた春の夜の月はおぼろにかすみ、河音だけがさやかに聞こえることよという意と、細谷川といえば、河音がさやかだとして有名であるが、こここの春の夜の月はおぼろにかすんでいる意がこめられている。

「さやけき」河音と、それと対照的な、おぼろな春の月をだしているのである。この歌の一首前も同じ「春月」の歌題であるが、よもすがらかすめる月の影ながら行かふくもやはれくもるらん

(一三八)

と、かすんだ月を詠じている。このイメージが次の(28)の歌にも残像として働いている。

おもひをのぶ

(28) かずならぬみのゝを山のひとつ松ひとりきめてもかひやなからん

(一四三)

「おもひをのぶ」はそのまま「述懐」ということである。歌題からして、すでに歎きの表白の姿勢を示している。

「かずならぬみのゝを山」は「かずならぬ身」と「美濃のを山」がかけられている。また、「みのゝを山のひとつ松」は「ひとり」

を導入する序の働きをしている。「みのゝを山」とは、美濃国南宮山のことである。「ひとりさめて」とは、独り悟ついてもの意。

一首は、このつまらない我が身が、あの美濃のを山のひとつ松のよう、独りだけ悟ついても、なんのかいもないだろうという意となる。ここでは「さめる」を迷いの夢から覚めたとしたが、別の見方をすれば、世の濁りにしまないで、独り超然としているともとれる。いずれにしても、もののかずでもない自分独りが覚めていても、なんのかいもないという気持一悟りの境地に向おうとする手前で述懐しているのである。

この歌は、

思ひいづやみののを山の一つ松契りしことはいつも忘れず

(伊勢・新古今・恋五・一四〇七)

を念頭において詠歌されている。また、「おもひをのぶ」の二首目は、

たえぬるか身はうき舟のつなでなわひく人もなきよをわたりつ、
で、やはり、とりたててくれる人もない自分を歎いている。

(一四四)

月にむかひておもひづけし

(29) 風そよぐ竹のは山の秋の月のどかにすまぬ世こそしらるれ (一四六)

月に向つて種々なことを思い続けたといつて詞書 자체、ある夜の孤

独な作者のシルエットを彷彿とさせるものがある。

川瀬頭注は、初句を「風そよぐ」として、「風がよそよそと音をたてる」としているが、これは「風そよぐ」の翻刻誤りからくる誤解である。

「風そよぐ竹のは山」は、風にそよぐ竹と、竹のは山をきかせていいる。「竹のは山」に対して、富倉評釈は「山城にある歌枕。深草大路長講寺橋の西二町餘にある」とするが、確かに、

ふかくさやたけのは山のゆふぎりに人こそみえねうづらくなり

(家隆・玉吟集・二〇五三)

など数例がある。また、「のどかにすまぬ」には「澄む」と「住む」がかけてある。

一首は、風にそよぐ竹のは山の秋の月を見ると、澄みわたつてばかりいられないように、のどかに住んでもいられない世であること

が思ひ知らされることとなる。

自然現象を見て、我が身の境遇を思いあてるというより、のどかに住んでおれない思いが痛切なために、自然の現象をも、それにひきつけて見てしまう詠歌態度である。

ゆきふる日、ひえの山にのぼりて

(30)のこりつるまきのしたみち猶たえてあらし吹しくみねのしら雪

(二七四)

兼好は雪の降りしきるなかを、比叡山に登つて行つた体験を持つ。

勿論、延暦寺に関連することで、仏道修行のためである。『のこりつるまきのしたみち』とは、雪にとざされることなく残つていた楓の下道のことである。楓の下道は、例えば、枝かはす梢に雪はもりかねて木のしたうすき楓の下みち

(権大納言家定・玉葉・冬・九六四)

の歌にみられるように、枝が茂つているので雪がもりかねて積りにくるものとしてある。だから最後まで雪にとざされずに残つてゐるのであるが、(30)の歌では、その道まで雪が降り積つて絶えてしまつたとする。そこに積雪のすごさと吹雪の激しさが示されている。

一首は、雪にとざされないで最後まで残つていた楓の下道までも、雪が降り敷いてとだえてしまい、雪をともなつた嵐が、激しく峯の辺に吹いている景となる。

「猶たえて」というところに、全山雪に埋めつくされた状況をだ

し、「あらし吹しくみねのしら雪」と体言止めにしたところに、峯を吹きわたる吹雪の激しさが窺える。

(昭和57年3月15日受理)